（1）柏崎日報新春特別号掲載

柏崎日報社転載許可済

2023年1月1日　P52-53

柏崎リーダー塾チームしなぷす×新潟産業大学

新潟産業大学 地域連携センター長　春日　俊雄

柏崎リーダー塾チームしなぷす × 新潟産業大学

今、新たな地域づくり

新潟産業大学
地域連携センター長　春日　俊雄

はじめに

第5期柏崎リーダー塾（全3チーム）の一つ「しなぷす」（代表・会田望さん）から新潟産大に学生とのコラボによる社会実験の協力依頼があった。今後の急激な人口減少に対応した新たな地域づくりへの社会実験である。この活動を長年、地域づくりに取り組んできた視点から報告したい。

チームしなぷすが考える柏崎の活気あるまちづくり

「チームしなぷす」のメンバーは会田代表のほか、大塚裕也さん、佐山直人さん、三宮健さんの4人。まずチームしなぷすの考えについてふれたい。

現状認識＝柏崎の人口は2040年に約6万人の予測。

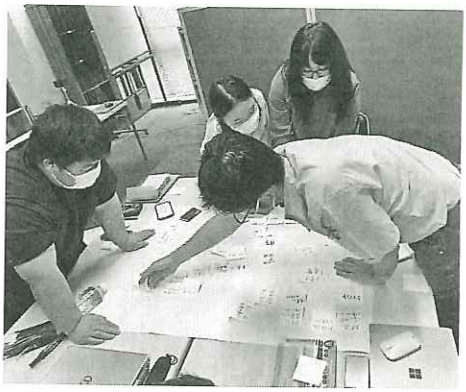
問題意識＝一人ひとりが現状のままだと「活気の減少」が生じる。

未来像＝思いを行動に移す人を増やし活気の好循環で「活気あるまち」にする。

仮説＝若者に「思いを行動に移せるような活動」に参加してもらい「日常にワクワクする若者」を増やす。

実証＝新潟産大、新潟工科大には約千人の学生が在籍。市外出身者の割合も多く、活動を通して柏崎の魅力を知ってもらうことで、柏崎に対する「思いの変化」が分かるのではないか。

実証のプロセスは、「自分のやりたいことを挙げて言語化をする」「メンバー全員で計画を立てる」「計画を実行し、メンバーに成功体験を持ってもらう」というものである。



2022年6月、しなぷすと産大実行委員会が初顔合わせ。「夏祭りで何をしたいか」とヒアリング、ディスカッションを進めた。ポストイットを使い、次々と提案が生まれた

計画づくりと実施

新潟産大からは樋口萌香さん、本間陸斗さん、佐藤凪紗さん、今村奈津希さんが参加した。企画会議は延べ7回に及び、ポスターの製作は本間さんが担当した。8月6・7日に高柳町じょんのび村で「和っしょい！じょんのび夏祭り」が開催された。1日目には、太鼓集団「鼓明楽（こあら）」による演奏、屋台等によるフードコート、スカイランタンなどが行われた。2日目は子ども縁日でオオクワガタのプレゼントや水風船を使ったストラックアウトなどに大勢の親子が参加。2日間の参加者はおおむね700人となった。

活動の成果

実施後、しなぷすは学生ヒアリングからポジティブな心情の変化と柏崎に対する思い入れを深めたことが確認された。将来への提言として「この手法はさまざまな世代にも変化をさせていくことで活用が可能」「来年度もこの活動を継続し、試行錯誤を重ねながら『活気あるまち』を実現していきたい」と結んでいる。

私は、この活動から地域づくりの第一の柱は「参加の場づくり」であると改めて感じた。また活動における熱量の大きさや主体性と心情の変化は比例するのではないか。さらに「気付き」「学びの原動力」「目標の発見」「目標の共有」「チカラを合わせる」「周りを巻き込む」→「達成感」→「小さな誇り」「心情の変化」の好循環が生まれたのではないかと考えた。

ジョン・D・クランボルツ教授（1928～2019）は「計画的偶発性理論」でターニングポイントの8割が本人の予想しない偶然の出来事によるものと証明した。計画的偶発性を起こす行動特性について、五つの行動特性を持つ人にチャンスが訪れやすいと述べている。①新しいことに興味を持ち続ける②失敗してもあきらめずに努力する③何ごともポジティブに考える④こだわりすぎずに柔軟な姿勢をとる⑤結果がわからなくても挑戦することである。

学生の活動にかかわる気持ちの変化を検証したことはこれまでになく、双方にとって有意義な活動になった。チームしなぷすに感謝したい。

「夏祭り」当日、勢ぞろいの新潟産大運営メンバー

エネルギーホールで行われた柏崎リーダー塾の成果発表会。大学生とのコラボを発表する「しなぷす」のメンバー

高柳町商工会青年部から組み立て指導してもらったたるみこし。「夏祭り」のシンボルとして、会場に設置し、もり立てた

（2）2023年1月7日（土）1面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆産大レクチャー　ア・ラ・カルト〈183〉

「コモンズの悲劇」権田　恭子　講師

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈183〉

コモンズの悲劇

権田　恭子

本学でまちづくりや地域連携に係る授業を担当するようになって間もなく10年になる。ゼミナールでは、地域に飛び出し、実践的な活動を重視しているが、講義形式の授業では、まちづくり初学者に向けてしばしば「コモンズの悲劇」という理論を紹介している。

コモンズとは元来イギリスにおける市民が共同の権利を有している「共有地」のことを言い、日本でのかつての「入会地」、今日では道路や河川、公共施設などより広義に捉えられている。こうした共有財をさまざまな人々が利用することで発生する管理上の問題を指摘したのが、1968年に生物学者のハーディーが発表した「コモンズの悲劇」である。

ハーディーの問題意識は、当時の人口拡大の状況を踏まえ、経済活動の発展に伴う環境破壊を危惧したものである。ある牧草地（コモンズ）で複数の農家が家畜を飼っている。1軒の農家が自身の事業を拡大しようと家畜の数を増やし、牧草地を積極的に活用すると、はじめはその農家は以前よりも利益を得る。しかし、皆が同じように家畜の数を増やしていくと、いずれは過放牧となって牧草が枯渇してしまう。すなわち、個々人にとって経済的に合理的な行動を選択しても、最終的には誰も得をしないという現象である。世界人口は80億人に達し、また、SDGsへの関心の高まりをみても、50年以上前に発表されたこの指摘は、今日の地球規模の環境問題にも通じる問題かもしれないが、「まちづくり」に係る議論では、その解決策の方に注目したい。

「コモンズの悲劇」の解決策の一つ目は「すべての土地を私有化して共有地をなくす」である。しかし、市場に委ねるこの方法では、例えば古都の景観といった地域全体のブランドを形成、保持することは困難となる。

二つ目は「使用料など個人を監督するシステムを設ける」である。行政や監督権を有した団体等が介入することになるが、このさじ加減、あるいは監督権の寡占、独占によっては、例えば「税金が掛かるのなら使用しない」と考える人が増え、結果的に資源が過少にしか使用されず、社会に利益をもたらさないという「アンチ・コモンズの悲劇」が発生する恐れがある。

三つ目は「当事者同士が課題を共有し、ルールをつくり、みんなで守る」である。これこそが、まちづくり的な考え方、解決策と言える。

人口減少が進む今日の地方都市においては、地域資源の過少使用によるアンチ・コモンズの悲劇の方が深刻なように感じる。市街地に目立つ空き地や空き店舗、発掘、発信しきれていない魅力的なものが、まちの中でくすぶっているのではないか。その所有者、管理者が誰かとは別次元の議論として、市場に委ねるでも、行政に託すでもなく、生活者自身が自分たちで生活環境を育み、活（い）かし、守っていくという「小さな公共性」の考え方が求められているのである。

（講師）

＝毎月1回掲載＝

柏崎日報社転載許可済

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

学生消防隊の活動幅広く

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

学生消防隊の活動幅広く

柏崎市消防団は市内の複数の分団・隊から結成され、各地域の担当が緊急時の災害対応や日頃の火災予防活動などを行っている。

その中に「学生消防隊」という組織がある。同組織は市内2大学と看護学校の学生から構成されており、本学からは7名の学生が入団している。

主な業務は消防団の広報活動や市民に向けての防火対策の周知が中心だが、救命講習の受講や原子力地域防災リーダー研修への参加など実務に関する内容もあり、活動は多岐にわたる。

昨年は、市内で3年ぶりに開催された「えんま市」でも活動を行い、来場者へ「消防団活動のPR」、「防火グッズの配布」を行った。

団員の一人である本学の田中真由さん（3年）は活動を通して「地域の方々との交流が幅広く出来たと思います。特にえんま市では、コロナ禍で直接交流することが出来なかった地域の方々と関わることで得るものは多かったです。また、普通救命講習で学んだことを活（い）かして、いざ必要な場面に遭遇した際には私が率先して動き、人命救助にあたりたいです」と、これまでの活動に手応えを感じている。

柏崎市消防本部の消防総務課杉田一仁消防団係長からは、「消防団を取り巻く環境も、少子高齢化の影響を受けており、その中で若い学生消防隊の皆さんの各活動は、消防団全体の活性化につながっています。今後も若い発想で学生消防隊にしかできない活動を期待しています」と、エールが送られた。

地域防災の要である消防団の存在は、私たちが安心して生活を送るために必要不可欠な存在である。学生は地域の一員として活動する中で、その役割の重要性を学んでいる。

（同大学地域連携センター）

柏崎日報社転載許可済

◆優秀体育人表彰に30人

市スポーツ協　22年の功労賞は3氏

優秀体育人表彰に309人

市スポーツ協　22年の功労賞は3氏

市スポーツ協会（坂井和之会長）による2022年優秀体育人表彰の受賞者が決まった。体育功労賞、指導者賞、スポーツ栄誉賞、優秀競技者賞などに個人・団体で延べ309人が選ばれた。

体育功労者賞は3人。同協会の副会長や事務理事を務めた植木正一氏は、協会の法人化や選手強化事業などを推進した。柏崎剣道連盟で理事長や副会長を歴任した品田賢一郎氏は、大会誘致などに尽力。市少林寺拳法協会で理事長や副会長を担った庭山克己氏は西山地区で長年、子どもらへの指導に当たり、健全育成に貢献した。

指導者賞には、市陸上競技協会の佐藤光介さん（三中教）、柏崎刈羽ゴルフ協会の佐藤昌宏さん（産大附属教）が選ばれた。ともに全国大会出場者の育成などに力を注いだことが評価された。

スポーツ栄誉賞には、昨夏にセルビアで行われた水球女子の18歳以下世界選手権に日本代表として出場したアルボンウォーターポロクラブ柏崎（アルボン长2）所属の山田果林さん（産大附属2年）が選出された。

体育功労賞と指導者賞の表彰式は20日に産文会館で行われる同協会100周年記念式典を兼ねた「新春スポーツ集う会」の席上で実施される。この他の受賞者の表彰式は2月11日にアルフォーレで。受賞者は次の通り（かっこ内は所属）。

【体育功労賞】

植木正一（市スポーツ協会）▽品田賢一郎（柏崎剣道連盟）▽庭山克己（市少林寺拳法協会）

【指導者賞】

佐藤光介（市陸上競技協会）▽佐藤昌宏（産附）

【スポーツ栄誉賞】

山田果林（産附）

【優秀競技者賞】

陸上▽木村峻也（産附）＝インターハイ男子200㍍3位

競泳▽小山風香（翔洋）＝国体女子100㍍平泳ぎ3位、インターハイ女子200㍍平泳ぎ6位など▽山崎はるか（翔洋）＝IOCジュニアオリンピックカップ夏季大会女子100㍍バタフライ3位、200㍍同7位

水球▽アルボン长2男子（棚村克行、稲場航平、新田一景、高田勇希、阿保悠斗、平田一成、吉田浩基、林和希、稲場悠介、石山真吾、前野寿紀、小椋裕介）＝日本選手権3位▽同女子（宮川華音、小浦英莉子、金精友香、佐藤由依、前野美月、栗林陽華、小出未来、長谷川陽子、長谷川麟子、梅村香穂、今村花、高田いづみ、山吉瑠那、渡辺あかね、山田果林）＝日本選手権ベスト8▽同U17男子（村山成琉、茂田祥海希、山田暁也、小川航平、加藤慶大、樋口征那、徐浩智、郭亞樂、牧野稜、佐藤瑞生、品田大育、長門亥城、斎藤秀吾）＝全日本ジュニア選手権8位▽同U17女子（柳霧海綺、山吉瑠那、佐藤由依、山田果林、三宅昊、牧瑛吾、武石絢羽、長門郁樹、福田佳寧、本間心音、瀬下碧海、樋口真彩）＝全日本ジュニア選手権4位

バレーボール▽上杉海琉（鏡が沖中）＝全国都道府県対抗中学バレーボール大会ベスト8

ソフトテニス▽鈴木愛香（新潟トキめきクラブ）＝国体成年女子6位

空道▽佐々木翼（柏崎空道協会）＝秋季全日本空道ジュニア選手権U19男子2位、全日本空道ジュニア選手権U16男子2位

【競技者賞】

陸上▽吉田亜夢路（柏高）＝北信越高校総体男子走り高跳び1位▽岡村迅（産附）＝同男子棒高跳び1位▽中野翔太（同）＝同男子円盤投げ2位▽矢代珀（同）＝北信越高校新人大会男子八種競技3位▽近藤愛加（同）＝県高校総体女子棒高跳び1位▽松田芽葉（同）＝北信越高校新人大会女子七種競技2位▽産附（大瀧玲輝、白井爆弥、木村隼也、布川琉翔）＝同400㍍リレー2位▽産附（布川結太、木村隼也、反町幹太、白井爆弥）＝同1600㍍リレー1位▽須貝瑠央（三中）＝全日本中学校通信県大会1年女子100㍍1位▽歌代咲彩（柏崎T&F）＝県小学生選手権6年女子100㍍1位▽田辺玲心（同）＝同共通5・6年女子80㍍障害1位▽駒野華莖（同）＝同共通5・6年女子走り高跳び1位▽小熊惺太（同）＝5年男子1500㍍1位▽柏崎T&F・A（田辺玲心、鈴木爽加、小林美結、歌代咲彩）＝同共通5・6年女子400㍍リレー3位▽柏崎T&F（小林愛依、小山陽菜乃、小山美咲、梅沢綾）＝同共通3・4年女子400㍍リレー3位

競歩▽安斎優真（翔洋）＝北信越高校総体男子440㍍個人メドレー2位▽須貝心美（柏高）＝同女子200㍍バタフライ3位▽柏崎翔洋（山岸はるか、小山風香、吉田愛璃、樋口更紗）＝県総体女子400㍍メドレーリレー1位▽吉田心咲（刈羽小、SA柏崎）＝NST県小学生選手権女子50㍍・100㍍バタフライ1位▽歌代咲彩（比角小、SA柏崎）＝同女子50㍍自由形1位、200㍍個人メドレー1位▽SA柏崎（吉田心咲、中島瑠唯、樋口凛子、歌代咲彩）＝同女子200㍍リレー・同メドレーリレー1位

軟式野球▽オール柏崎（細山広希、村山晾太、木戸晾太、鈴木健太郎、堀田雄大、池原瑠河、入沢歓、村山大地、五十嵐一樹、田村尚之、金子大翔、小林寛之、須田崇仁、木声拓生、町田航輝、遠藤龍一、山田和樹、沖山一樹、小田悠平、中西達也）＝県都市対抗大会2位▽長坂脩汰（瑞穂中）＝全国中学生都道府県対抗大会北信越ブロック代表決定戦1位▽瑞穂中（長坂脩汰、梨本羽月、阿部勇人、小川航希、渡辺咲来、渡辺憲吾、仙海殿、高橋颯、丸山悠真、伏江悠、吉田煌、阿部陽向、野崎蒼、小林瑞祈、荒堀巧太郎、保坂朋希）＝県中学総体3位

ソフトテニス▽清水彩・吉原花海（新潟トキめきクラブ）＝北信越選手権大会一般女子ダブルス2位▽加藤颯人・山本楓也（産附）＝県高校総体男子ダブルス1位▽産附男子（近藤絢斗、渡辺康介、加藤颯人、山本楓也、古川椋大、佐々木紳、青木優河、深井葉太郎）＝北信越高校総体団体2位

ハンドボール▽柏崎男子（小松龍也、北村大成、星野達也、真貝拓実、川端剛慎、佐藤顕侍、坪谷大地、板場功将、広川翼、田辺聖真、岡村成真、堀秀仁、須田練太朗、神林奏汰、前原恰恩、佐藤海音、石田若弥、伊藤陽真、飛鳥井真希斗、重野翔）＝県高校総体1位▽柏高女子（高橋美唯、青木渚、関朱理、高橋瑠美、渡辺萌日、大谷桃子、小林朱里、長谷川まどか、髙野華水流、村田こころ、馬部美由優、田辺愛子、高橋涼風）＝県高校総体4位

卓球▽中島躍輝、荻原塔矢（産附）＝北信越高校総体男子ダブルス3位▽産附男子（片山桂、風間征也、松浦倚拳、望月季亜蒙、荻原塔矢、中島躍輝、倉夢歩）＝同学校対抗3位▽佐藤野々華（産附）＝同女子シングルス2位▽山岸愛菜（同）＝県高校総体女子シングルス1位▽山岸唯菜・山岸愛菜（同）＝同女子ダブルス1位▽産附女子（和田咲穂、倉島美生、小林皇来、渋谷真央、山岸唯菜、山岸愛菜、佐藤野々華）＝北信越高校総体学校対抗3位

バドミントン▽高桑圭佑（柏崎ジュニア）＝北信越小学生選手権6年男子シングルス2位▽小池健大（同）＝県ジュニア小学生大会6年以下男子シングルス1位▽阿部和武（同）＝ヨネックス杯争奪県小学生大会男子Bクラスシングルス1位▽小池健大・三沢琥朱（同）＝北信越小学生選手権6年男子ダブルス2位▽大倉想和・光井楓真（同）＝北信越小学生選手権5年男子ダブルス3位▽柏崎ジュニア（三沢琥朱、阿部和武、光井楓真、大倉想和、高桑圭佑、中村大飛、小池健大）＝県小学生団体対抗大会6年以下1位▽岡本明純・植木翠乙（柏崎ジュニア）＝北信越小学生選手権6年女子ダブルス3位▽柏崎ジュニア女子（稲葉愛莉、竹内蒼来、品田希歩、中村夢青、岡本明純、植木翠乙）＝県小学生団体対抗大会6年以下1位▽同（相馬七彩、竹内来未、松本麗羽、光井萌華、小黒りも、阿部紗奈、山田絆愛）＝同4年以下1位

サッカー▽グランヴォーチェ柏崎U15（佐野輝、村山秀磨、桜井蓮仁、佐藤翔、松井昭一郎、村松聖梨、関根航太、桒原蒼、宇都宮大空、今井幸大）＝県選抜中学生フットサル大会3位▽同（雪野勇成、日野陸翔、宇都宮月空、広川颯、高橋幸汰、永井大翔、小倉瑞輝、常山幸佑、吉田悠翔、目崎蒼大、大塚稜、金子晄、吉田圭祐、村山瑛恵、佐藤友輝、宇佐美渉、串田琉大郎、西村夏尚）＝U13リーグ2022県大会ベスト4▽グランヴォーチェ柏崎U12（長谷川旺右、日野爆太、丸山准生、上村海音、石田翔李、近藤伊織、渡辺翔平、野沢蒙人、木村葵海、品田陽飛、松本澄、椎谷映仁、道又理玖、広川友、三浦孝太、椎谷剛仁）＝マルソーカップ県キッズ大会3位

なぎさた▽加藤帆乃美（常盤）＝県高校総体個人の部1位

空手道▽片山明星（柏崎空手道連盟）＝北信越小中学生選手権中学生1年男子形2位▽小柳翔（新潟産大）＝北信越学生選手権男子組手2位

【奨励賞】

陸上▽馬崎弘明（市陸上競技協会）＝全日本マスターズ投てき5種競技選手権85歳以上の部1位

テニス▽堀井渉（柏崎テニス協会）＝日本スポーツマスターズ県予選会男子35歳以上シングルス1位

ラージボール卓球▽田辺輝男・与口幹（柏崎卓球連盟）＝全日本選手権混合ダブルス140歳以上の部3位▽片山真琴（同）＝全国大会一般女子シングルス2位

空手道▽空和会（小川大陽、北村文人、佐々木迅、梅沢宜華）＝県スポーツ少年団競技別交流大会中学生団体形1位▽同（加藤慶長、高橋凛仁、目崎橙真）＝同小学1・2・3年団体形2位

ワンバウンドバレーボール▽枇杷島チーム（田辺伊作、田辺浩治、大矢富一、本間八重子、中村アイ子、田辺和子）＝県大会1位▽荒浜チーム（品田博、渡辺仁、柴野良造、品田修治、品田晃一、柴野久男、渡辺美枝子、柴野由利子）＝県大会2位▽比角チーム（勝野俊幸、伊藤正喜、小林香織、山田啓子、中村イツ、町田トシイ、竹村意美子、名塚由美子）＝県大会3位

カーリング▽小池純義、大橋哲也（柏崎氷上競技連盟）＝日本シニア選手権5位

【賞助会員10年感謝状】

ナガイ、ケー・エー・プラスチックス、ウエキハウス、山崎工業

柏崎日報社転載許可済

◆敬募者の書画　会員作品多彩
良寛記念館で4月18日まで

出雲崎インフォメーション

敬慕者の書画 会員作品多彩

良寛記念館で4月18日まで

出雲崎町米田、良寛記念館（永宝卓館長）の常設展が入れ替わり、良寛の遺墨を中心に縁者・敬慕者の書画がお目見えした。特別展「近代の書家展」や、「良寛記念館応援倶楽部てまりの会」会員の所蔵・制作作品も初めて展示された。

展示は町指定文化財「今日乞食逢驟雨」、この時期にふさわしい書「天満宮」など。良寛が弟・由之に宛てた手紙、貞心尼が柏崎の山田静里に宛てたと思われる書簡はいずれも初めての出品となった。

また、近代明治時代の山岡鉄舟、勝海舟から、現代の相馬御風、村上三島、貞心尼と親交があった照阿（市内若葉町の極楽寺、第28世住職・静誉上人）の作品も。入り口にはダウン症の書家・金沢翔子さんが2019年に同町で揮毫（きごう）した大作「天上大風」。埼玉県川越市の川名思孝さんが22年に制作・寄贈した「書の肖像　良寛」は、托鉢（たくはつ）をする姿を「良寛」の文字で表し、現代風な額でユニークな作品だ。

また会員所蔵品では、大石内蔵助（おおいしくらのすけ）からの書状、市内の吉川妍石さん、阿部玉枝さん、新潟産大書道部員らの作品など。「てまりの会」副会長・宮嶋美恵子さんの書「愛」は鳥の羽根で揮毫した。

同館では展示ケースの照明をLEDに変えており、永宝館長は「明るくなり、作品の墨文字がよりくっきり見えるようになったので、ゆっくり眺めてほしい」と話す。会期は4月18日まで、会員作品のみ3月末まで。時間は午前9時～午後5時。入館料は一般400円、高校生200円、小中学生100円。3月まで水曜休館。問い合わせは同館（電話0258・78・2370）へ。

托鉢（たくはつ）をする姿を文字で表現した「書の肖像　良寛」＝出雲崎町米田の良寛記念館

（6）2023年1月27日（金）1面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆留学生呉さんらたたえる
中央ロータリー懸賞文コンテスト

留学生 呉さんらたたえる

中央ロータリー 懸賞論文コンテスト

柏崎中央ロータリークラブ（横村尚人会長、会員数39人）は23日、2022年度留学生懸賞文コンテストの表彰式を新潟産大で行った。優秀賞の新潟工科大3年・呉童（ゴ ドー）さん(22)らの研さんをたたえた。

同コンテストは2004年、産大、工科大で学ぶ留学生から地域との交流、相互理解を深めてもらおうと設けられた。本年度は文化、経済、国際交流、時事などをテーマに、7点の応募があった。審査の結果、優秀賞1点、佳作、努力賞、参加賞各2点が選ばれた。

表彰式で横村会長は受賞者の研さんをたたえ、「今後も懸賞論文が継続し、応募者が増え、一層盛り上がることを祈念したい」と述べ、受賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡した。

審査員を務めた工科大の李虎奎（リ ホキュ）准教授は「教科書では学べないことを柏崎で学んでほしい」、産大の蓮池薫准教授は「新型ウイルス、少子化、経済、食文化など、日本だけでなく共通の問題としてとらえ、なるほどというアイデアが見られた」。

同クラブの牧口幸嗣・国際奉仕委員長は「いずれも優劣のつけがたい論文だった。柏崎にいて気がつかないことがたくさんある。若い留学生の斬新な目で切り取ってもらい、改めて再認識した」とそれぞれ講評した。

優秀賞の呉さんは昨年9月に来日した。「受賞はびっくりした。非常にうれしい。柏崎とハルビンは高齢化と少子化が経済低迷を招いているという点でよく似ている。柏崎に明るい未来があることを願って、自分の考えを書いた」と述べた。

懸賞文コンテストの受賞者は次の通り。副賞は最優秀賞5万円、佳作3万円、努力賞2万円、参加賞5千円。

優秀賞＝「少子化の影響を受ける柏崎とハルビン」呉童（中国・工科大3年）▽佳作＝「柏崎市における地域文化振興の提案～じょんのび村を例として～」ムハンマド アブドルカリム モンタナロ（インドネシア・産大3年）、「日本と中国の食文化の違い」雷德歓（中国・産大4年）▽努力賞＝「ウズベキスタンと日本の経済分野における関係」サトロフ ボビル（ウズベキスタン・産大2年）、「中国と日本における決済方法の比較」海日孕（中国・産大4年）▽参加賞＝「コロナを振り返る3つの段階と今後の経済発展の展望」姜尚昆（中国・産大3年）、「コロナ禍での変化」琴斯哈（中国・産大大学院2年）

柏崎中央ロータリークラブの留学生懸賞論文コンテスト表彰式＝新潟産大

柏崎日報社転載許可済

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－
常盤高生と交流授業

【新潟産業大学】
地域に学び地域をおこす
――実践活動レポート――

常盤高生と交流授業

「総合的な探究の時間」の活動の一環として、昨年12月14日、柏崎常盤高校2年生と本学学生による交流の機会を得た。

今回の交流授業は、高校生と大学生が進路選択に対して共に考え、意見を出し合うことで、高校生の進路選択や将来についての意識向上を目指したものである。

参加学生は、すでに就職先が決定している4年生9名と、これから本格的な就職活動が始まる3年生3名の計12名（同高校の卒業生3名を含む）。小グループに分かれ、大学生が公務員（警察、消防）や、民間企業の営業職、事務職など、それぞれの進路決定までの就活体験を生かして、高校生から出された進路に関する悩み相談や、大学生活に関する質問に答え、また逆に質問することで高校生の思いを引き出してあげる形で進められた。

経済経営学科3年の入沢輝さんは常盤高校の卒業生。「後輩たちが大学受験の勉強方法や進路について、真剣に考えていることが伝わってきた。高校当時の実体験を話すことで、高校生が自分を見つめ直してもらう手助けになれたかと思うと、参加して良かった」と振り返る。文化経済学科4年の樋口萌香さんは新潟市内の上場企業（倉庫・運輸業）への就職が内定している。「いろいろな可能性をもっているからこそ、周りの言葉に必ずしも従う必要はないが、耳を傾けたうえで、目標がある人もこれからの人も、自分のために頑張ってほしい」とエールを送った。

高校生のリアルな声を真摯（しんし）に受け止めることで、大学生自身も社会人としての新生活に向けて初心を思い返す良い機会となった。また、今回の交流を通じて「産大生も結構頼もしいな」「地元の大学という選択肢もアリだな」と感じてくれた高校生が一人でもいてくれたら幸いである。

経済学部講師・権田恭子（同大学地域連携センター）